

令和3年度 学校経営計画に対する最終報告書

石川県立羽松高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取組（改善策等）
1 生徒一人ひとりの適性と能力に応じたきめ細かな学習指導を行う。また、GIGAスクール推進チームを中心に校内研修を行い、授業実践に努める。	① 基礎学力の定着に向け、各教科で「授業がわかりやすい」と生徒が満足できるよう、授業改善に努める。	授業改善により、高校生のための学びの基礎診断の成績（文章読解・作成能力検定3級以上）が向上した生徒の割合が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。	50% C (前年40%)	国語の授業で意見文の書き方指導やグラフから情報を読み取る活動を取り入れ、週末課題として添削指導を行った結果、級ごとの合格率は、準2級は100%(前年0%)、3級は46.7%(前年40%)で成績の向上が見られた。しかし、4級の合格率が14.3%(前年50%)で、意見文の作成に関する問題の得点率が低く、自分の考えを表現することに対する苦手意識がある。二極化が進んではいるが、一人一台端末の利用によって、全体的には表現する力は上がってきている。 今後は、教職員全体で、授業も含めすべての教育活動の中で、生徒自身が考えをまとめ、文章にしたり発言する活動をこれまで以上に取り組んでいく。
	② 授業力の改善と、教員の資質向上を図るため、校外への研修等に積極的に参加する。	校外への研修に、6回以上参加した教員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である	82% B (前年73%)	昨年度はコロナ禍の影響があり、校外での研修は中止となり、研修の参加回数は減少したが、オンラインを使用した研修の充実や対面での研修もある程度行われた。また、GIGAスクール推進リーダーを中心とした校内ミニ研修を月1回ペースで実施したり、大学から専門家を招いての発達障がいを含む生徒理解のための校内研修を3回実施するなど本校独自の校内研修は充実している。 今後も研修の多様化が進むと思われるが、組織として研修を生かしながら実践を積み重ね、振り返ることで、教員の資質向上に努めていく。
	③ 生徒が意欲的に授業に参加するよう、ICT機器を効果的に活用し、授業改善に努める。Chromebook等を積極的に活用する。	ICT機器を授業で活用することで、意欲的に参加していると思う生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	81% A (前年73%)	GIGAスクール構想の年間計画に従い、各教科におけるChromebookの有効活用の研究が進んだ。生徒はICT機器を使った授業に抵抗もなく参加できるようになっており、より意欲的な取り組みが増えた。一方でICT活用に消極的な教員が一定数みられるが、さらに研修の機会を増やし、今後は積極的な実践の蓄積が期待される。
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	一昨年から始めた高校生のための学びの基礎診断は、検定の結果を見ると成績の向上が見られ、喜ばしい。ただ、受験者の二極化傾向が進んでいるという点が気になる。また、ICT機器を授業で積極的に活用している結果が表れている。校内研修も充実しているようだ。教員側に苦手意識がなくなるように、今後の研修等で研鑽を積んでほしい。			
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	今年度は文章作成能力検定に向けて、週末課題等できめ細かい添削指導を行った。合格率が上がったことで、生徒の自信にも繋がった。一方で、結果や取り組みに見られた二極化対策として、既存のノートだけではなく、圧迫感や強制感なく取り組めるノートやChromebookの活用等、ICT機器の具体的な活用場面を想定した教材の工夫も行う。			
2 生徒指導の充実および通級指導によって、基本的な生活習慣を確立し規範意識を高めるとともに、道徳心や倫理観の向上を図る。	① いじめや非行、スマートフォン等を利用した不適切な行為を未然に防止するために、生活指導や研修等を充実し、落ち着いた学習できる環境を整える。	いじめや不適切行為に関する訴え・相談件数が A 0件である。 B 1件である。 C 2件である。 D 3件以上である。	0件 A (前年0件)	いじめの訴え・相談件数はないが、いじめに対し傍観者として関係のない立場や態度で考えている生徒が一部いるため、機会あるごとに自己啓発を念頭において指導している。また、不適切な行為の未然防止の徹底のために、各種安全指導教室等は学年単位で実施し、小集団での指導が効果的であった。 教職員全体で常に連絡を取り合い、日頃から生徒の様子をよく観察・把握し、適切な支援や啓発を進めながら、いじめをしない態度の育成を含め規範意識の醸成に向け指導を継続して行う。
	② 生活指導および通級指導をとおして、言葉遣いや身だしなみについて、正確な判断に基づき、適切な行動が取れるように、情操教育を充実する。	校則や社会のルール、TPOを意識して生活していると思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	97% A (前年87%)	年間を通して、言葉遣いや身だしなみについて大きな問題もない。登校時の、教員による笑顔での挨拶や出迎えが生徒との信頼関係構築にも好影響を与え、生徒の学校生活での落ち着きをもたらしている一因である。 一人ひとりの社会的資質や行動力などを高めることを目指して、今後も継続的な指導を行う。
	③ 健全な生活習慣を確立し、朝食摂取の習慣を身につけるとともに、食育や栄養指導を充実する。	朝食を毎日食べる生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	76% C (前年81%)	9月と1月のヘルスチェックアンケートの比較では、朝食を食べる習慣が悪化した生徒が1年生と3年生でそれぞれ2名おり、冬季休業中の生活習慣の乱れが影響していると思われる。今年度、保護者懇談の際、それぞれの生徒のヘルスチェックアンケートの結果を示し、保護者の協力のもとで生活習慣の改善を促す取り組みを行い、改善された生徒もいる。 今後も「保健だより」の内容の工夫や担任・保護者との連携も含めて組織的に生徒への健康指導の充実を図る。
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	現在いじめ件数0はすばらしいが、スマートフォン等のトラブルによるいじめは、なかなかわかりにくい。問題が生じるきっかけとなるような日常生活をしっかりと確認し、指導をしてほしい。健全な生活習慣は、家庭内の問題でもあるが、学校でも何か気づいた点があれば、保護者への連絡を密にしてほしい。			
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	日頃から生徒の観察や声掛けをすると同時に、教員間における情報交換をより密に行っている。また、昨年度提案されたアンガーマネジメントの研修会を行い、怒りのコントロールについて学んだ。教員側の穏やかな対応が生徒との信頼関係の構築にも好影響を与え、学校生活の落ち着きをもたらしている。今後も家庭との連携を大切に指導していく。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取組（改善策等）
3 教育活動全体を通じて主体性やコミュニケーション能力等の社会性を身につけ、社会人として必要な基礎能力を育む。	① 生徒が主体的に活動し、自分の考えを主張できるよう、授業に協働作業やグループ活動等を積極的に取り入れる。	授業中に、自分の考えや意見を述べるができると思う生徒の割合が、 A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	91% A (前年79%)	コロナ禍において、積極的なグループ活動などが制約されてはいるものの、GIGAスクール構想の実現が急速に進展し、本校においても、1人1台端末（ロイロノートなど）の利用により、取りこぼすことなく生徒全員が自分の意見を表現できるようになり、主体的に授業に参加している意識が高まった。 今後も1人1台端末の有効活用にむけて研修を定期的実施することで、主体的で対話的で深い学びにつながる学習活動ができるよう、学校全体で授業改善に励む。
	② 学校行事等において、生徒各自が責任感を持って取り組み、自己有用感と協調性が高まるような働きかけを行う。	校内外の各種行事に、積極的に取り組んだと思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	86% B (前年68%)	生徒会行事である文化祭・体育祭や球技大会では、教員側の働きかけに応じて積極的な行事への参加の姿勢が見られた。 今後は、生徒が行事に対しての準備を計画的に行うことを重点目標とし自己効力感等を育成する。また、行事後の振り返りシート（キャリアパスポート）等で自己有用感や協調性などについて自身の変容や成長を自己評価する取り組みを更に推進する。
	③ 安全で安心な学校づくりに欠かせない避難訓練等において、生徒が的確な判断の下、身を守るために必要な行動を取れるように指導する。	緊急避難時に守るべき事項と、自分が取るべき行動について、理解できたと思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	87% B (前年97%)	防災訓練（6月）では防火シャッターを降ろしての避難行動を実体験させるなど、実践的な防災訓練を工夫して行った。原子力防災訓練（12月）では、放射線に関する防災知識および防災行動について事前学習を充実して行った。 次年度も生徒、教員ともに迅速な対応が身につくよう継続して指導する。また、防災と災害に関係のある教科等（地歴公民・理科・保健・家庭など）で横断的な指導も行う。
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	人とコミュニケーションを取ることが苦手な生徒が多いと聞いていたが、授業において、一人一台端末の利用によって、自分の考えや意見を言える生徒が増えたことに驚いた。今後も自分の思いを言葉で表現できる指導実践を積極的にしてほしい。また、緊急避難時における対応は良好である。次年度も安全安心な学校づくりを目指してもらいたい。			
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価 結果を踏まえた今後の改善方策	昨年度に比べ、回復した学校行事もあるが、今後は生徒が行事に対して計画的に行うことを重点目標としたい。また、行事後は、振り返りシート等で自己有用感や協調性などについて自身の変容や成長を自己評価する取り組みを推進する。			
4 キャリア教育を推進し、就労意識を高めるとともに、一年次からの進路指導を充実し、卒業生徒全員の進路実現を目指す。	① 各学年に適切なキャリア教育と進路指導を実施し、就労意識を高めるとともに、生徒が自ら進路目標を決定できるように支援を行う。	具体的な進路目標を持ち、進路実現のために努力すべきだと考えている生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	76% C (前年75%)	今年度初めて実施された金沢中央高校での企業ガイダンスの全校生徒の参加や進路ガイダンスの職業体験授業に対する生徒の関心は高く、生徒の意識付けには効果的で進路希望調査において未定者数も減った。 来年度の卒業予定者3年次生3名に対して、外部人材（相談支援専門員）を招いて個別の就業支援会議を既に開始しており、進路目標を考える機会を増やすことと併せて、個に応じた進学・就労支援の充実に努める。
	② 生徒の進路志望を実現するため、関係諸機関や地元企業との連携を深め、生徒の希望・適性・能力に合致した進路指導に努める。	卒業生の進路実現の割合が A 100%である。 B 90%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	86% B (前年50%)	7名の卒業生のうち、就職3名・進学3名の生徒が進路決定し、進路未定者は1名であった。来年度は、コロナ禍ではあるが、3年次生を中心にインターンシップを再開するなど、個に応じた進学・就労支援の充実に努める。
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	自分が何をしたいのか、決められずにいる生徒がいると思う。先生方の働きかけで、卒業までに目標が決まる生徒も多いと思う。企業ガイダンスや進路ガイダンスは幅広い視野を養う、大変良い機会だと思われる。進路指導では、コロナ禍で様変わりした厳しい社会をどう生き抜いていくか、生徒一人ひとりの適性に合ったきめの細かい指導をお願いしたい。			
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価 結果を踏まえた今後の改善方策	今年度もジョブ体験学習等の活動は出来なかったが、県内の定通の高校全体で企業ガイダンスが行われ、全学年で参加した。次年度は、保護者と生徒の意向に沿った進路希望を実現するために、組織的に対応していく。外部人材（相談支援専門員）を招いての個別就業支援も引き続き充実させ、個に応じた進学・就労支援に努める。			

令和3年度 学校経営計画に対する最終報告書

石川県立羽松高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取組（改善策等）
5 教職員の多忙化改善を目指す。	① 教職員の多忙化改善に向けた取り組みを実施し、適切な校務分担と、効率的な業務の遂行に務める。	職場の多忙化改善に取り組んだ、と答えた教職員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	91% A (前年91%)	約半分の教員が、多忙化改善に積極的に取り組んでいると認識している。要因として、GIGA スクール構想に対応した、Chromebook 等の授業での利用が進み、授業改善が多忙化改善に有効に働いていると思われる。 職員の意識改革をすすめ、全職員の協力体制のもと業務の平準化を最重要目標とし、より効率的に校務を遂行することで、今後も多忙化改善につなげる。
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価	ほとんどの教職員が自主的に職場の多忙化改善に取り組み、働き方改革への意識が向上したという結果は評価できる。GIGA スクール構想に対応した Chromebook の活用で、授業の教材等も随分様変わりしたと聞く。今後も ICT 機器に振り回されることなく、それらを上手に活かし、多忙化改善につなげてほしい。			
学校評議員・学校関係者評価委員会の評価 結果を踏まえた今後の改善方策	Chromebook 等の授業での利用が進み、授業改善が多忙化改善に有効に働いていると思われる。全職員の協力体制のもと、業務の平準化に努め、今後も仕事に集中できる環境を整える。			